

令和4年度 調布市立富士見台小学校 学校評価報告書 (学校長 内藤 みゆき)

学校の教育目標

- ㊦ 深く考える子 (知識や技能を身に付け、それらを活用し、問題の解決に向けて追究することができる児童)
- ㊧ 自他を愛する子 (自他を尊重し、認め合いながら協力して行動することができる児童) ㊨ 自ら鍛える子 (自分のめあてを自覚して、工夫しながら粘り強く取り組むことができる児童)

目指す学校像(ビジョン) 例) 学校像, 教員像, 児童・生徒像

認め合い、学び合い、伸びゆく心と言葉を育てる学校

調布市立学校における共通した領域 <短期的な経営目標>

	1 豊かな心(徳)	2 確かな学力(知)	3 健やかな体(体)
自己評価	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組
	① 月1回の校内委員会や週1回の生活指導夕会での情報共有を、児童への組織的な対応につなげる。また、年3回のアンケートを中心に、児童の困り感等を汲み取り、適切な支援につなげ、自己肯定感を向上させる。	① 全教室統一の掲示「声の大きさ」「ハンドサイン(納得・同じ・別の意見など)」を活用して指導することで、意見交流の基礎指導を校内共通で行う。また、OJT ミニ研修(年間10回)を教員の指導力向上につなげる。	① 元保護者による講話及び年3回の食物アレルギー研修、対応訓練の実施を通して、対応マニュアルの周知徹底と確実な実施を行い、正しい知識を児童に身に付けさせるとともに、教職員の危機管理意識を高度に保つ。
	② 「学習&生活のルール」を全校で共有し、規律の定着を図ることで安心できる生活環境を整える。また、いじめに関する授業の実施及び研修を通して、教員の指導力向上を図り、児童の自己理解・他者理解を深めていく。	② 校内研究を中心として、主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善に取り組む。殊に児童の学習意欲を喚起し、考えることや意見交流することの楽しさを味わわせる授業づくりに努める。	② 体力向上を図る取組(年間2回以上)を工夫し、運動の楽しさを味わわせる。また、学期ごとの目標や学習活動でのめあて等を明確にし、事後の振り返りをさせながら、粘り強く課題に向かう姿勢を育む。
	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)
① 学校評価アンケート(児童)において学校が楽しいと肯定的な回答 目標: 95%以上 結果: 93%	① 学校評価アンケート(児童)において、「学力定着」の肯定的な回答 目標: 85%以上 結果: 88.2%	① 食物アレルギー事故及びヒヤリハット事例 目標: ゼロ 結果: ゼロ	
② 学校評価アンケート(児童・保護者)において「基本的生活習慣」「自他を愛する」の項目に対する肯定的な回答 目標: 90%以上 「基本的生活習慣」 結果: 児童 88.8% 保護者 92.8% 「自他を愛する」 結果: 児童 90.7% 保護者 92.3%	② 児童アンケートにおいて、授業への理解及び授業への主体的取組に対する肯定的な回答 目標: 昨年度比 +6Pt 以上 結果: (4~6年アンケートの平均値) 「理解」 → 昨年度比 -3Pt 「主体的取組」 → 昨年度比 +9Pt	② 学校評価アンケート(児童・保護者)において、健康教育の項目への肯定的な回答 目標: 90%以上 結果: 児童 92% 保護者 95.6%	
学校関係者評価	全体的に学習規律の定着が図られているが、集団生活が苦手な児童も増えてきていると感じる。廊下の掲示物や作品展の作品などから、子供たちが伸び伸びと生活し、自己表現していることが分かる。学校内外で他者と関わる機会が戻りつつあり、子供同士、大人、地域等、様々な方と出会うことが豊かな心の醸成につながっているのではないかと感じる。	子供たちがとても楽しそうに前向きな様子で授業に取り組んでいる。どの学年も個を大事にしながら意見を引き出したり交流させたりしているのが良い。教員も澁滞としており良い雰囲気の中で学習できている。教員が個に応じた対応を工夫したり、iPadを活用したりしながら、授業の充実を図って指導している様子が好ましい。	新型コロナウイルスが収まってきて、運動会や体育の授業をはじめ、休み時間等も通常に戻りつつあることが喜ばしい。縄跳び教室や体操教室等がゲストティーチャーの活用及びホップステップダッシュの実施等、体力向上に向けた数々の取組がされているのが良い。安全を確保しつつ充実した食育の取組が行われていることも大変良い。

学校の特色を生かした領域 <短期的な経営目標>

	4 言語能力・情報活用能力の向上	5 特別支援教育	6 地域との連携
自己評価	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組
	① 考えを「もつ」「表す」「伝え合う」「深める」授業実践を積み重ね、考えを言語化したり、必要な情報を集め判断したりする活動を通して、言語能力・情報活用能力の向上を図る。	① 新型コロナウイルス感染症の状況を鑑みつつ、計画に沿った特別支援学級児童と通常の学級児童との交流・共同学習を進め、多様性尊重への理解促進を図る。	① 「地域学校協働本部」の活動を更に充実させ、「放課後学習教室」や昨年度から開始した「漢字検定」等の取組を児童の学習意欲向上につなげていく。
	② 年間2回の読書月間を中心に読書活動を推進するとともに、日常的な言葉遣いの指導等を通して、言語感覚を養い、豊かな言葉の獲得を目指す。	② 特別支援教室での指導が、在籍学級での指導・支援に活かされるよう、専門員やコーディネーターを窓口として円滑な連携が図られるようにする。	② ゲストティーチャー等、外部人材の活用による体験的な学習の充実を図るため、「地域学校協働本部」のコーディネート力を生かしていく。
	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)
① 学校評価アンケート(児童・保護者)において、「言語活動」及び「ICT機器の活用」項目への肯定的な回答 目標: 85%以上 「言語活動」 結果: 児童 83.6% 保護者 82.9% 「ICT機器の活用」 結果: 児童 94.2% 保護者 91.2%	① 学校評価アンケート(児童・保護者)において、「自他を愛する」の項目への肯定的な回答 目標: 90%以上 結果: 児童 90.7% 保護者 92.3%	① 学校評価アンケート(児童・保護者)において、「地域学校協働本部」項目への肯定的な回答 目標: 85%以上 結果: 児童 90.1% 保護者 83.9% ※保護者回答「わからない」が15.5%	

	② 学校評価アンケート（児童・保護者）において、「読書活動」項目への肯定的な回答 目標：85%以上 結果：児童 89.6% 保護者 85.7%	A	② 学校評価アンケート（児童・保護者）において、「特別支援教育」項目への肯定的な回答 目標：80%以上 結果：児童 88% 保護者 74.1% ※保護者回答「わからない」が25.4%	B	② 学校評価アンケート（児童・保護者）において、「体験的な学習」項目への肯定的な回答 目標：80%以上 結果：児童 86.3% 保護者 85.6%	A
学校関係者評価	「言語活動」に関するアンケート（児童・保護者）で、「当てはまらない」「分からない」が他の項目に比べてやや多いのが気になる。ネット社会が拡大し、色々な言葉が氾濫している世の中で、難しいかもしれないが、教育の大切さを感じる。		特別支援学級との交流・共同学習の成果が、児童の心の豊かさの成長に役立っていると思う。個別に特別な支援が必要な子供たちに対して、様々な工夫をして支援をしたり、居場所を確保しようとしたり、学校全体で努力していることが素晴らしい。		情報化社会の現代だからこそ、実物に触れたり、見たり、経験したりする学びを大切にしてほしい。地域学校協働本部と学校が連携して様々な体験的学習を取り入れていることがとても良い。協働本部の活動が児童にとって大切なものになってきていると感じる。	

人材育成・組織運営	
自己評価	<ul style="list-style-type: none"> 経営支援部の役割を明確にして校務改善に取り組んだ。モバイル端末について、学習に関わる部分はICT教育担当に任せ、管理・運用にかかわる部分（転出入の際の回収及び貸与に関する事務手続き等や故障対応、アプリ更新、年次更新に関わる周知や作業準備など）は経営支援部が担うようにした。経営主任に校務軽減をつけ、特定の教員に負荷が集中しないようにすることができた。 特別な支援を要する児童が増加する中で、特別支援教育コーディネーターの役割も一層大切になってきている。関係諸機関との連携が円滑に進むよう、4名のコーディネーターの役割分担を進めたかったが、思うようには進まず、課題が残った。 校内研究は、若手教員からの声に基づき、授業のUD化に取り組んだ。初年度の研究であったが、試行錯誤しつつ、校内共通の手立てをまとめ、各教員がすぐに授業に生かせる成果物を生み出すことができた。研究主任の声掛けのもと、各教員が自分事として授業改善を図り、自身の工夫を伝え合い、学び合う姿勢があったからこそと考える。 教員間で、自身の得意分野を生かし、他教員に助言する光景が日常化している。相談し合い、助け合う雰囲気醸成されていることが、教員のメンタルヘルスにも良い影響を与えているものと考えている。今後も職層に応じた職責の自覚を促しつつ、より充実した教育活動が実施できるように努めたい。
学校関係者評価	<ul style="list-style-type: none"> 全体的に教員が澁滞しており、子供たちも明るく伸びやかな様子が感じられる。言葉遣いも穏やかで、教員自身が言語環境の一つであるとの意識をもっているのだと思う。引き続き、そうした環境作りに努めてほしい。 スクールサポーターや地域・学生ボランティア等を生かしながら、支援が必要な子供へのサポートを工夫して行っており、担任の助けになっていると感じる。若手の教員も生き生きとしており、成長していく様子を嬉しく思う。 コロナ対応で苦慮して来たことと思うが、保護者が来校して子供たちの様子を見ることができている機会を、開催方法を工夫しながら複数回設けており、そうしたことが、保護者の安心感にもつながっていると感じる。 児童の様子や作品等から、伸びやかに明るく学校生活を送っていること、組織運営が良好であることが窺えた。次年度もより一層充実した教育活動になるよう期待している。

中期的な経営目標の達成状況
<p>① 自己指導能力を高め、自他を愛し、自律した言動がとれる児童を育成する。</p> <p>⇒児童アンケートで「自他を愛する」項目の肯定的回答が90%を超えたのは、自己肯定感向上のため「認め、励まし、褒める指導」を日常的に行ってきた成果と考える。しかし乍ら「自己有用感」項目の肯定的回答は82.8%に留まっており、「わからない」との回答が9.2%と1割近くいることは課題である。また、「規範意識・基本的生活習慣」項目の肯定的回答も88.8%で、9割を切っている。気持ちを切り替えたり苦手なことに向き合ったりすることが苦手な児童も増えており、自己指導能力の向上の必要性は一層高まっていると考える。</p> <p>② 基礎基本を定着させ、自己肯定感を高めつつ、主体的で対話的な学びを通して考えを深めていく児童を育成する。</p> <p>⇒算数ベーシックドリルの結果を検証し、習熟度別算数少人数担当と学年担任が連携して未習熟分野の補習を行うことで、確実に全体の習熟度が上がっていることは成果と考える。また、全教科において対話的な学びを意識し、意見交流や学び合いの学習活動をどの学年も実施している。自分の考えや思いを言語化することに苦手意識をもつ児童も少なからずいるが、校内研究と併せて個別の支援方法を教員が模索しつつ実施し、表出させることに心を砕いている。こうした地道な指導・支援を今後も継続していく必要がある。</p> <p>③ 健康保持・体力増進に努めるとともに、自ら考え、判断し、粘り強く実践する児童を育成する。</p> <p>⇒ゲストティーチャーを招いて「縄跳び教室」「走り方教室」「体操教室」等、楽しみながら様々な動きを経験し技能を高める機会を複数回設定した。また、体力テストの結果を踏まえた教具の補充や運動機会の創出等を行うこともできた。児童アンケートの「健康教育」項目の肯定的回答は92%（内「よくあてはまる」59.9%）と児童自身の意識の向上も見られる。しかし、コロナ禍の影響もあってか、体幹が弱く姿勢保持が難しい児童や運動自体に前向きになれない児童も少なくない。また、怪我もしやすくなっており、安全を確保しつつ様々な動きを経験させたり、運動の楽しさを味わわせたりすることは、今後も大切と考える。</p> <p>④ 全ての基盤となる言語能力と情報活用能力の向上を目指し、言語環境を整えるとともに読書活動の推進や対話的な学びの充実を図る。</p> <p>⇒iPadを学習道具として日常的に使っていけるよう、学校共通ルールの定着と授業改善を同時に行ってきたことで、情報活用能力は向上してきている。しかし、言語能力については語彙力や表現力の差が大きく、アンケートの肯定的回答も児童・保護者ともに8割に留まっていることは課題である。</p> <p>⑤ 特別支援教育を推進していくとともに、通常の学級・特別支援学級・特別支援教室の組織的連携を図る。</p> <p>⇒特別支援学級との交流・共同学習が復活してきており、多様性の理解にもつながっている。特別支援教育コーディネーターを軸とした通常の学級と特別支援教室との組織的連携については、現状、個々の努力によるところが大きく、持続可能な組織にしていくことが課題である。</p> <p>⑥ 保護者・地域との連携を密にし、教育活動の充実と安全確保を図るとともに、CSへ向けた理解促進に努める。</p> <p>⇒地域学校協働本部の活動が学校に欠かせないものとして充実してきており、CSに向けて良い連携が取れていると感じる。しかし、保護者アンケートの結果を見ると「わからない」との回答が15.5%となっており、周知や広報に課題を感じる。</p> <p>人・組 職層に応じた自身の役割を自覚し、学校経営方針を実現させるための取組を工夫しながら動くことのできる組織。</p> <p>⇒学校経営方針を念頭に、職層に応じた自身の役割を自覚し主体的に動く教職員集団育成への取組は、今後も引き続き行っていく必要がある。</p>
次年度の重点課題
「自己指導能力の向上」「全ての基盤となる言語能力と情報活用能力の向上」「主体的で対話的な学びを通して考えを深めていく児童の育成」